

栃木県小山市におけるアライグマの捕獲試験Ⅱ

高橋安則（県民の森管理事務所）・丸山哲也（自然環境課）

The capture examinationⅡ of the racoon in Oyama city, Tochigi Prefecture.

Yasunori Takahashi, Tetsuya Maruyama

1 はじめに

栃木県に生息するアライグマについては、県南部から北東部にかけて広い範囲で分布が散在していること(戸田ほか2011)、県南部では、個体数の増加や定着化が進行しつつあること(高橋ほか2011)が明らかになっている。これを受けて、県は、アライグマの完全排除を最終目的として、平成24年2月に外来生物法に基づく防除実施計画を策定した。この計画では、積極的な捕獲を主要な対策としており、効率的で確実な捕獲方法の究明が課題となっている。

このため計画の策定に先行して平成22年度に市販の箱わなによる捕獲試験を行い、逸走个体防止のための箱わなの補強対策の必要性などを明らかにしたが(高橋2011)、捕獲対策を推進するために必要な知見を収集するには、さらに長期間の実証試験を積み重ねる必要がある。

そこで、冬期におけるアライグマの捕獲上の課題を明らかにするため、簡易な補強対策を施した市販の箱わなにより、小山市において試験捕獲を行ったのでその結果について報告する。

2 調査地と方法

試験は、アライグマの定着化が進行している小山市において、センサーカメラによりアライグマの生息が画像で確認された5箇所(A～E)で行った(図-1)で行った。この地域は、標高約25mで、平地林、クリ林、住宅地が点在する。

箱わな(ハート社製モデル1089)は、プラスチックダンボール製のカバーを装着し、逸走防止対策として全面の入り口部の上・下辺にL字アングルを装着したものを(写真-1)使用し、誘引餌(ドッグフード、コーンスナック)とともに1箇所あたり2～3台設置した。

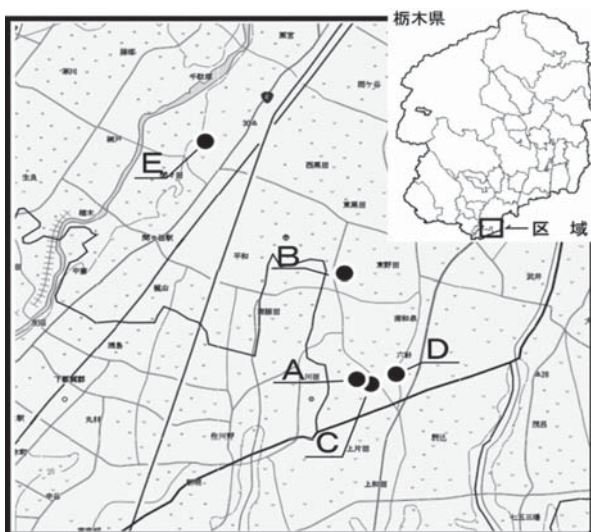


図-1 捕獲試験地の位置

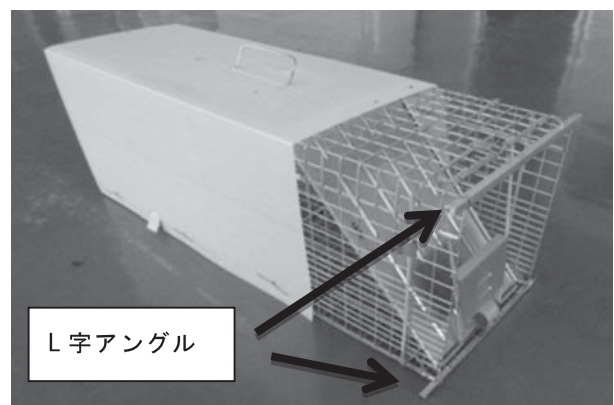


写真-1 L字アングル補強を行った市販の箱わな

箱わなの設置期間は、箇所によって異なるが、平成 23(2011)年 12 月 12 日から平成 24(2012)年 3 月 16 日の期間の間で行った。

箱わなの作動状況及びアライグマの行動を監視するため、モーションセンサー付きカメラ (KeepGuard KG680V : 検知 1 回あたり 30 秒の動画、撮影後のスリープ時間は 1 秒) を最低 1 箇所あたり 1 台設置した。アライグマのわなへの馴化を促すため、カメラでアライグマの進入が確認されるまでの期間と休日等でわな見回りができなくなる前日には、給餌を行ったうえで前扉を解放ロック状態とした。

3 結果と考察

今回の捕獲試験における総捕獲努力量は、14 台の箱わなで 426TN(Trap Night)であった(表-1)。

アライグマは 4 箇所の試験地で 8 頭捕獲し(写-2)、箱わな 1 基あたりの捕獲効率は 0.019 頭/基・日であった。一番多くアライグマが捕獲されたのは 4 頭捕獲した箇所 C(捕獲効率:0.043)で、アライグマのねぐらとなる廃倉庫に隣接している場所であった。箇所 C と距離で 100m 程しか離れていない箇所 A でも 2 頭捕獲されており(捕獲効率:0.019)、この一帯がアライグマの高密度生息地であったことが確認された。

表-1 箱わなによる捕獲試験の結果

箇所 ID	わな ID	設置日数	稼働日数	箇所別設置日数	箇所別稼働日数 (NT)	種毎の捕獲数							捕獲効率(捕獲数/NT)						
						アライグマ	ハクビシン	ネコ	イタチ	タヌキ	カケス	シロハラ	アライグマ	ハクビシン	ネコ	イタチ	タヌキ	カケス	シロハラ
A	1	60	25	210	104	2	1	6	0	2	3	3	0.019	0.010	0.058	0.000	0.019	0.029	0.029
	2	96	47																
	3	54	32																
B	4	94	44	206	103	1	1	4	10	1	0	0	0.010	0.010	0.039	0.097	0.010	0.000	0.000
	5	58	24																
	6	54	35																
C	7	89	41	194	92	4	0	5	0	2	6	0	0.043	0.000	0.054	0.000	0.022	0.065	0.000
	8	51	19																
	9	54	32																
D	10	89	31	169	79	1	0	4	1	2	0	0	0.013	0.000	0.051	0.013	0.025	0.000	0.000
	11	54	31																
	12	26	17																
E	13	40	24	79	48	0	3	0	0	0	0	0	0.000	0.063	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	14	39	24																
計		858	426	858	426	8	5	19	11	7	9	3	0.019	0.012	0.202	0.110	0.076	0.094	0.029

アライグマ以外に捕獲許可の対象としていたハクビシン5頭を捕獲し殺処分した。この他、延ベネコ19頭、イタチ11頭、タヌキ7頭、カケス9羽、シロハラ3羽を捕獲したが速やかに放鳥獣した。個体識別が可能なネコについては1度放逐しても再び捕獲される個体があった。アライグマ以外の種の錯誤捕獲は、アライグマの捕獲を進める上で大きな支障となる。特に昼行性の鳥類がアライグマの活動が活発になる前に捕獲されると箱わなの稼働率が大きく低下することから、今後は、錯誤捕獲防止の対応を検討する必要がある。

今回の試験で捕獲されたほ乳類5種について、捕獲期間中の捕獲効率の推移を図化した(図-2)。

アライグマの捕獲効率は、捕獲当初の12月は高かったが、1月には急激に低下し、その後も低下傾向を示した。一方ネコとイタチは捕獲期間前半の12月と1月に比較して後半の2月と3月の捕獲効率のほうが高かった。アライグマの捕獲効率低下の要因としては、捕獲による生息密度の低下や捕獲されても放獣する種が先に捕獲されてしまうことによる影響等が可能性としてはあげられる。

いずれにしても捕獲従事者にとって、アライグマが捕獲されずに他の鳥獣ばかり捕獲される状況が長く続くことは、捕獲のモチベーションの維持に影響する。このため、完全排除を目指す計画であっても、センサーカメラによる監視等を前提として、捕獲の一時休止や捕獲場所の変更等、柔軟な対応が必用と思われる。



写真-2 捕獲される直前のアライグマ

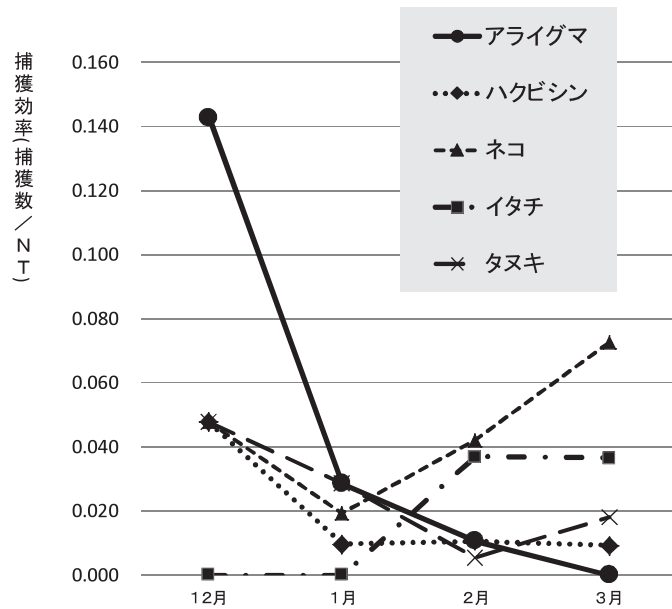


図-2 箱わなにより捕獲されたほ乳類の月毎の捕獲効率

設置していたセンサーカメラの画像から、今回の試験でいったんわなの扉が閉まった後に逸走したアライグマの個体は存在しなかった。このことから、L字アングルでの補強の効果が十分にあったと考えられる。ただし、アライグマが捕獲された後、L字アングルを点検すると、曲がりが生じ交換を余儀なくされたものもあった。曲がりが生じた原因は、L字アングル装着時または捕獲された個体が脱出を試みている間に、アライグマのアングルを押し上げる力で曲がりやすい方向に装着角度がずれたことによると考えられる。このことから今後はL字アングルの固定の仕方を工夫するか、L字アングルに変わる資材としてU字チャンネル等の使用を検討する必要がある。

4 引用文献

- 戸田春那・岡田奈々・高橋安則(2011)栃木県における痕跡による外来生物の生息確認調査：野生鳥獣研究紀要No.37：栃木県県民の森管理事務所：43-48.
- 高橋 安則(2011)栃木県小山市におけるアライグマの捕獲試験：野生鳥獣研究紀要No.37：栃木県県民の森管理事務所：40-42.